シニア活躍の地域づくりへ

北星学園大学名誉教授
まちラボSAPPORO代表
杉岡 直人

元気なシニアのいま

一億総活躍の先頭を切るのはシニア。いまや3500万人のシニアがこれからの日本社会を就労と消費の両面で支えていくことに。実際まわりを見回しても8割くらいは、元気（そう）な高齢者が。楽しいイメージが強調される余暇活動を満喫しているだけではなく、介護予防と健康寿命の向上を目指してラジオ体操やジョギングに登山にと身体を鍛えている人は激増しています。栄養バランスに気をつけて男性も料理を楽しむ人が目立ちます。ネットでオンラインツアーへの参加、zoom会議あるいはユーチューバーとしてネット投稿を楽しむシニアもみかけられます。心身の健康を保持し、就業や地域貢献活動、文化・スポーツ活動等に多様な形で参加し共に支え合うシニア。確かに人生100年時代が到来しています。

フィットネス倶楽部（鷹栖さつき会）

ところで、元気な高齢者は好きなように楽しく過ごしていて結構ではないか、といえばそうでもありません。あちこちにいろいろな人が生活している現実のなかで、皆がそこそこ楽しく元気に生活していなければ、お互いに幸せにはなれないのが集団生活を送る動物としての人間社会です。

例えば、①誇りと生きがいをもって心身の健康を保持すること、②就業や地域貢献活動、③文化・スポーツ活動などの多様な社会活動、④住民が共に支え合う仕組みを考えてみます。そこには、どこかで必ず他者とのつながりが必要となります。そこでは「人の役に立ちたい」というニーズの把握と情報収集や地域活動を推進するリーダーの存在等が不可欠です。

シニアの参加を促すためには、退職前・退職直後のタイミングで呼びかけることが大事です。そのメニューには、自己研鑽は自分で取り組む、集団に参加して仲間とともに活動するなら、どう取り組んだらいいのかという視点が必要となります。シニアの地域活動を促す行政としては、一定の情報提供の役割を果たす上で、「セカンドライフ」の場を考えることや「多世代交流」の場を考えることは欠かせません。それらを、ムリのない活動の継続として、身の丈にあった継続する活動スタンスや活動メニューの設定とサポーターの確保あるいは会場と活動資金の確保などが考えられなくてはなりません。

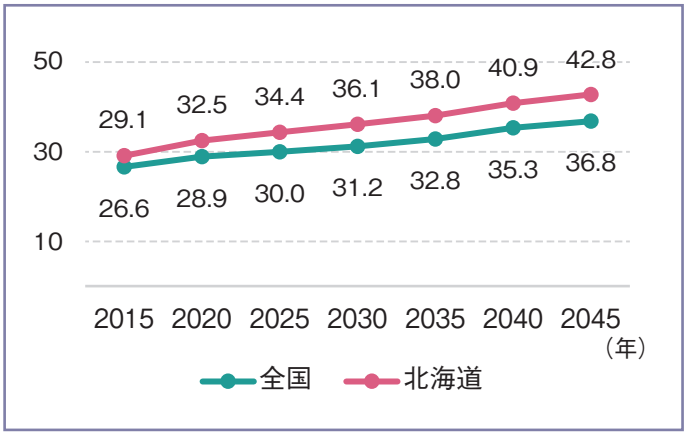

図　高齢化率の推移（単位：%）
「日本の将来推計人口（平成29年推計）」（国立社会保障・人口問題研究所）より

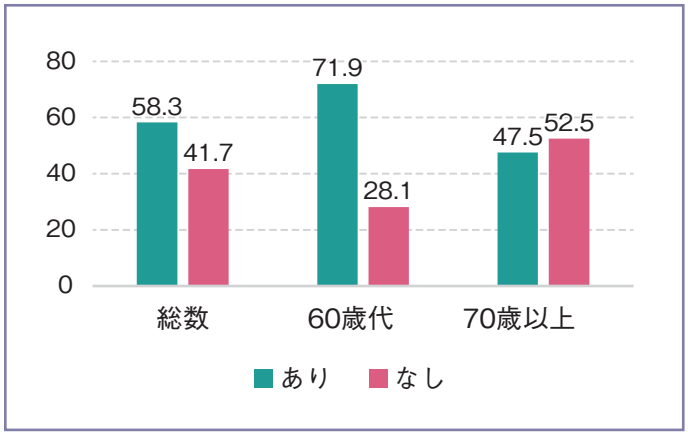

図　60歳以上の社会活動の状況（働いている・何らかの活動を行っている=あり、いずれも行っていない=なし）（単位：%）
「平成28年国民健康・栄養調査報告」（厚生労働省）より

自治体を動かすシニアへ

しかし、行政からの情報提供を待っているだけではシニアの活躍の道は開けません。そこで、①地域で仕事を含めて社会貢献活動をしたいというニーズを自治体につたえること、②多様な雇用の受け入れ側とシニアをマッチングする重要性を自治体に理解させること、③非営利の中間支援組織の設立と運営に参加し行政に働きかけること、④多様な雇用形態を開発してきた障がい者就労に学びマネジメントを担うシニアを支えること、が必須となります。仲間とともに雇われない働き方を実現していく上で、地域社会での活動は重要であり、奇しくも2020年12月4日に国会で協同労働の働き方を可能とする労働者協同組合法が成立し、新たなシニア参加のツールが誕生しました。多様な活動に参加するシニアは、高齢化が進む日本において21世紀型の公民連携をリードする担い手となります。

朝市（鷹栖さつき会）